

第1章 平成13年度の研究について

浜田 貴宏

1. 研究テーマ

友達とかかわり合いながら創る生活
～幼児の育ちに即した指導計画の再編成～

2. テーマ（友達とかかわり合いながら創る生活）の設定

・昨年度までの研究から

平成7年6月に、それまでの研究の成果を生かし、本園の教育課程及び指導計画が明文化される。

平成7年度から、研究の重点は個の理解へ向かう。一人一人の内面を見つめることを視점에事例分析を積み重ね、その中で「自分らしさ」を捉え直し「自分づくりのプロセス」を解明してきた。加えて、幼児の育ちを捉えるには「かかわり合い」に着目することが重要だということや、「かかわり合い」の中で他者を受け入れていくことが幼児の育ちにつながるが見えてきた。（3ページ資料1参照）

この研究を足がかりに、平成10年度から、研究の重点に教師の援助が加わる。「かかわり合い」を視점에事例分析を積み重ね、「あたらしい自分」の定義や「トラブル」の捉え、「創る生活」の捉えが明らかになった。加えて、一人一人の内面を探ることに留まらず、状況や雰囲気、個の抱える背景を視野に入れつつ、関係性を意識した援助が一人一人の幼児を育てることにつながるが見えてきた。（4ページ資料2参照）

このような、一連の研究の積み重ねの中で、上記テーマが私達の目指す幼児教育の姿を的確に表しているものだ、ということを実感してきた。同時に、上記テーマに掲げた幼児の姿を目指すとき、実際の私達の保育をまだまだ多くの視点で分析、省察し、幼児一人一人の育ちと学びにつながるような研究を進めていく必要があることを実感してきた。そこで、本年度もこのテーマのもと研究を進めていくことにした。

資料1

1. 「自分らしさ」の捉えについて

「自分らしさを出しながら」を研究テーマに設定した当時、私達は「自分らしさ」の捉えを、その幼児の見せるありのままの姿を全て受け入れることだと考えていた。

～中略～

再度、「自分らしさ」の捉えを見直すことにした。その中で明らかになったことは、①ありのままの姿の捉え、②容認と受容の違い、が明確になったことである。

～中略～

私達は、共同体の中で試行錯誤を繰り返し、他者とかかわり合いながら、切磋琢磨してよりよく生きようとする姿を「あたらしい自分」と明記し、「自分らしさ」の捉えとすることを共通理解した。幼児らの3年間の育ちを通して、援助の方法を反省する中で、「自分らしさ」の捉えを「在るがままの自分」から「あたらしい自分に向かう自分」に変えたのである。

2. 「自分づくりのプロセス」の解明

自分づくりのプロセス

| | 人とのかかわり | 身近な環境とのかかわり | 自分づくり |
|--------|---|---------------------------------|---------------------------------|
| 3 歳 | 友達の遊びを見るしたい遊びをする | 身近な環境に気づく | 興味関心のあるものとかかわろうとする |
| | 場やものを共有しているがそれぞれが違うイメージや思いで遊ぶ | 身近な環境に触れ親しむ | かかわりを通して、人や身近な環境を知覚する |
| | 友達と同じことをして、イメージを共有しようとする好きな遊びをする | いろいろなものに十分かかわり楽しむ | 人や身近な環境とのかかわりの中で自分の存在を認識する |
| 5 歳 | 役割を決めて遊ぶ気のあった友達と同じ遊びを繰り返す | ものの特性が分かり楽しむ好きなことや得意なことばかりに取り組む | 自分と他者との違いに気づいたり、他者を受け入れようとしたりする |
| | 友達と相談して遊びのルールをつくる 他の友達や集団にも目を向けかかわっていく | 何にでも、自分から働きかける | 社会的制約を受け入れながら、自己抑制をしようとする |
| | いろいろな友達と共通の目的をもって遊ぶ | ものの特性を生かし、工夫して自分の生活に取り込む | 幼稚園という社会環境を通して、よりよく生きようとする |

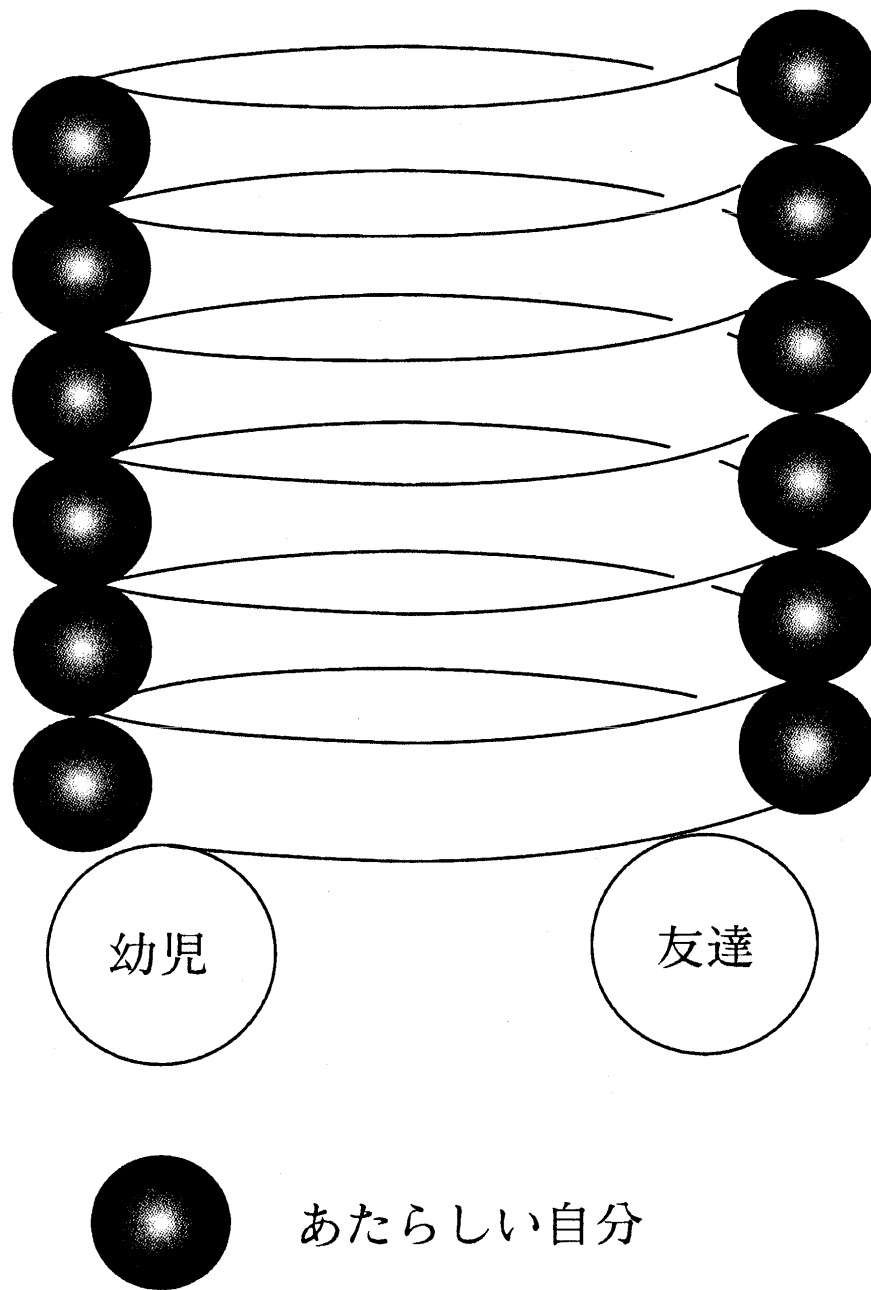
(以上、第44回金沢大学教育学部附属幼稚園教育研究発表会紀要より抜粋)

資料2

1. あたらしい自分のモデル化

その幼児なりに試行錯誤を繰り返し、友達とかかわり合う中で、新しい自分をつくっていく。その幼児とのかかわり合いを通し、友達もまたあたらしい自分をつくっていく。互いにかかわり合うことで、互いがあたらしい自分をつくっていく。それをモデル化すると以下のようなになる。

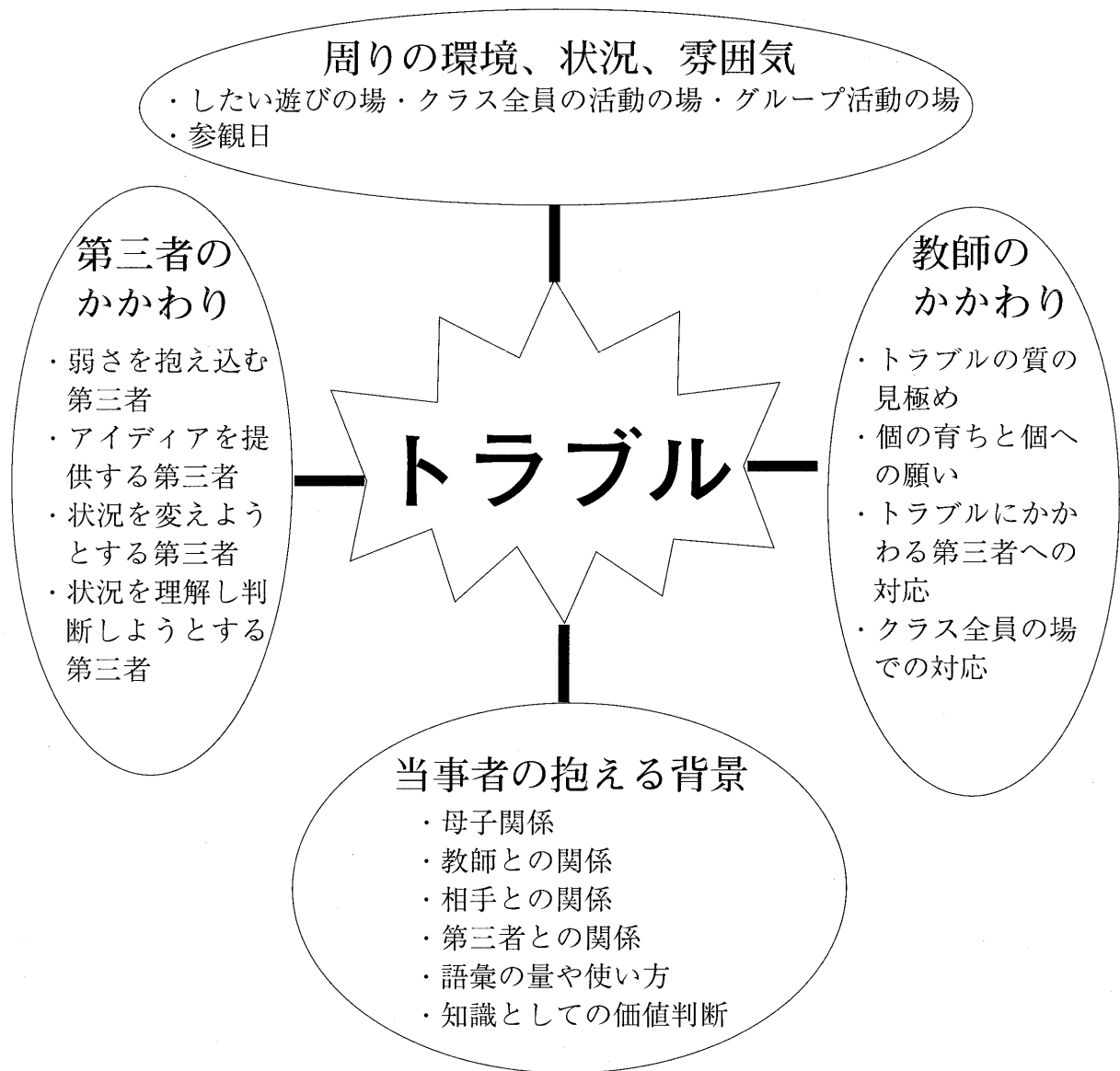
友達とかかわり合いながら創る生活



(以上、第45回金沢大学教育学部附属幼稚園教育研究発表会紀要より抜粋)

2. 「トラブル」の捉えについて

トラブルの事例を持ち寄って話し合い、見えてきたことを4つの観点から図式化したが、保育の現実はこのようにきれいに割り切れるものではない。状況の中でこれら全てが相まみえながら立ち現れてくるものである。重要なのは、実際の幼児らとの生活の中で起こるトラブルに対して、これらの視点を持ちながら対応していくことなのである。



(以上、第46回金沢大学教育学部附属幼稚園教育研究発表会紀要より抜粋)

3. 「創る生活」の捉えについて

私達は「創る生活」ぶりを

・ 様々な状況のもと、特定の集団内の成員同士が、互いの思いや考えを出し合い、説得したり納得したりしながら合意を形成し、目的に向かって進んでいく姿と捉えた。加えて、幼児らが「創る生活」に迫っていくためには以下に示す4つの側面を重視しそこに具体的に働きかけていくことが重要なのではないかと考えた。その4つとは

- ①生活の中のルーティン的な活動に着目した援助
 - ②幼児の育ちを考慮した援助
 - ③幼児らの関係性を意識した援助
 - ④幼児らの「つもり」を大切にした援助
- である。

(以上、第47回金沢大学教育学部附属幼稚園教育研究発表会紀要より抜粋)

3. サブテーマ設定（幼児の育ちに即した指導計画の再編成）の理由

(1) これまでの指導計画の反省から

私達は、これまで平成7年に作成された教育課程及び指導計画を参考にしながら毎日の保育を行ってきた。そして、実際の保育とのずれや反省点を教育課程や指導計画に反映させてきた。しかし、園全体での共通理解という面から見ると、毎週のように行われる研究会や日々の話し合いで心掛けてきてはいるがまだまだ深めていく余地があるのではないかと反省している。とりわけ、この共通理解は、幼児が自分でしたい遊びを展開する場において重要になってくることを、毎日の保育の中で実感している。

そこで、園全体での共通理解をこれまで以上に深めていきたいというのが理由の一つ目である。

加えて、私達の園ではこれまでの研究の積み重ねから、幼児が自発的に遊ぶ活動と、クラスあるいは学年での集団的活動を幼児の育ちと学びを保障する保育の両輪として重要視しているが、後者の集団的活動の面が、平成7年度版の期で捉えた指導計画では、私達の実際の保育を十分に反映していないのではないかと感じている。そこで、平成7年度版を大いに活用しながら、これまで以上に具体的な援助や環境構成を取り入れた、よりきめ細やかな指導計画へのステップアップを図りたいというのが理由の二つ目である。

(2) 環境の変化から

本園は100年以上も4歳児、5歳児がそれぞれ36名、2学級の小規模園であった。しかし、長年の要望が認められ、平成4年度から3歳児保育が始まり、平成5年度には学級進行も実施され、4歳児が2学級に、さらに平成6年度には5歳児も2学級となり、現在5学級153名となっている。また、平成7年の夏に金沢市の中央に位置していた広坂キャンパスから金沢市の南に位置する郊外の平和町キャンパスへと移転してきた。平和町キャンパスは幼稚園、小学校、中学校、高等学校が同一敷地内にあり、中でも小学校とは園舎がつながっており、上履きのまま行き来することができるようになった。近くには公園や児童会館などの公共施設があり、地理的に以前よりも利用しやすくなった。

このように、学級増、園舎の移転、園舎の構造的変化と、ここ10年の内にハード面での環境が劇的に変化してきた。加えて、平和町キャンパスに移転して今年で7年になるが環境のソフト面においても、幼児の様子やその時々状況に応じながらより適切な環境設定を心掛けており、それ故、その都度細かな点からダイナミックな点に至るまで様々に変化している。

平成7年度版指導計画は、広坂キャンパスでの毎日の保育を指導計画に反映している。従って、先に述べた環境の変化を十分に反映しているとは言い難い。そこで、平和町キャンパスならではの環境を指導計画の中に生かしていきたい、というのが理由の三つ目である。

(3) 幼児の姿から

ここ数年の幼児らの生活する姿が、7、8年前の幼児らの姿と比べて変わってきているということが、教官室でよく話題になる。「文字や数字など早くから覚えているけど、友達へのアプローチが下手だよね」「お母さんの前での姿と、幼稚園で見せる姿がずいぶん違うなあ」「親の前だといい子の姿を見せること多いね」「汚れることを嫌がる子が多くなってきたね」などなど、その話題は多岐に渡る。その中でも「個人の中でいろいろな面の育ちがアンバランスになってきている」という点が、どの教師も気になっていることである。この背景には、幼児期ならではの、身体で感じ、身体でかかわっていくといった、いわば環境における人やものとの関係性の中で、身体知とでも言うべき経験が乏しくなっているように感じている。私達自身が数年来幼児らの関係性を意識しながら保育を積み重ねているということもあるかもしれないが、毎日の保育の中で「そこで（友達やものに）かかわっていけばいいのに」「あの『まぜて』は形式的になっちゃってるなあ」等々、他者との関係を構築していく上で、あるいは、ものとかかわっていく上で今ひとつ物足りないと感じる場面がよく見られる。その姿を今の育ちと捉えたときに、やはり、「アンバランス」を感じ、その子なりに五感を働かせながら意欲的に活動できる体験を幼児期に持つことが大切なのではないかと考えさせられる。

それが、今の実態だとするならば、この幼児の姿を少しでも的確に捉え指導計画に反映させていきたいというのが理由の四つ目である。

(4) 保護者の姿から

「うちは一人しかいないから子育てに失敗できないのよ。あなたの所は二人いるからいいけれど・・・」「私の言ったことをなかなかしてくれないんです。そんな姿を見るとついイライラしてしまいます」「子どもがケンカをしたら、なんだか自分が悪いと思ってしまうんです」保護者から発せられるこのような言葉が年々増えてきている。ここからは、マニュアルのない子育てに対する日常の漠然とした不安、だからこそ管理しようとしてしまう姿、我が子と一心同体になっている親の姿が見え隠れする。しかし、このことは決して悪いとは言えない。逆に子育てに一生懸命だからこそこのような姿を垣間見せる親を支え、認めたり励ましたりしながら、共に子育てについて考えていくことが、幼稚園で保育を展開するときに相乗効果となって子どもに返っていくということを感じている。

そこで、上記のような側面を意識しながら、指導計画の中に活かしていきたいというのが、理由の五つ目である。

4. 研究の目的

- ・事例を検証しながら指導計画再編成に向けての視点を探る
- ・指導のまとめを作成し、指導計画の再編成につなげる

5. 研究の方法

(1) 事例研究をする

多くの目で、持ち寄った事例を読み合ったり、ビデオ撮影した記録を視聴したりして協議する。

事例は、エピソード風に綴ることとする。園の生活の流れの中のどの場面でもよいこととする。環境の構成・再構成の参考となるように、幼児の言動に対する教師の思い(「ハッとした」「どきとした」など)や、具体的な援助(認めた、共感した、見守った、叱った、アイデアを伝えた、など)について、できるだけ記入する。考察では、各学年のスローガンに照らし合わせながら分析し、指導計画の再編成に向けての視点についてもできるだけ明記していくこととする。

(2) 週案及び研究会での事例検証をもとに「指導のまとめ」をつくる

- ・具体的な幼児の姿をまとめる
- ・ねらいや内容のずれを修正し、まとめる
- ・環境の構成と教師の援助のずれを修正し、まとめる
- ・実際に読んだ絵本や紙芝居をまとめる
- ・実際に行った意図的な活動をまとめる
- ・基本的な生活習慣面を位置づけるようにする
- ・実際の幼児の経験内容や教師の援助、環境構成を5領域と関連付けながら位置づける